

昭和五十一年四月二十七日 ご講演

「宗教における生と死」

時間が少し長引くようでございますから、椅子に腰を下ろさしていただいて、ゆっくりとお話をさせていただけようと思うのであります。

先ほどこちらに参りまして、東京でこれほど閑静なよい場所はないですね。周囲が広くて春の緑がこんなに深い中で、諸君がたはじつに立派に幸福な学生生活を送っておられると、しみじみと感じたのであります。

どういう意味で和敬塾という名前がついたのか。それは、ただいまご紹介をいただいた前川（喜作）先生ご自身の胸の中にしつかりとあることと思いますが、じつはこの和敬塾の創立より少し前、戦争直後、兵隊さんにとられて帰ってきた四国の方が私のところへやってこられた。「日本は戦争で負けた。自分のうちには山もある、自然（じねん）もある。なんとか負けた日本のためにしたい。及ばずながら先祖代々受け継いできた財産を傾けて、新しい日本

の基となる幼稚園をつくりたい。ついては先生、どうか幼稚園の名前をつけてください」。突然のことで、四国の松山からわざわざやってこられ、私に名前をつけてくれという。はじめて会った人でありませんが、いろいろ考えたあとに「和敬幼稚園」という名前をつけてあげた。なぜ和敬という名前をつけたか。申しますと、これは私の考えであります。日本の文化というものをつくられた最初の方が聖徳太子である。あなた方が五千円札、一万円札でよく親しんでおられる聖徳太子ですが、今から一三五〇年の昔、この聖徳太子が憲法十七条というものをつくられた。その第一条が「和をもって尊（たつと）しとなす」。この「和」という字をおつくりになった。日本国民はいうまでもなく、世界中が、家族はもちろん兄弟、友人ことごとくが、和をもって尊しとしなければならぬ。世界と交わっても「和」でなければならぬ。どうすればその「和」を実現できるか、それが第二条。「篤

東京大学名誉教授 花山 信勝 先生

く三宝（さんぼう）を敬え。三宝とは仏法僧である。いずれの世、いずれの人かこの法を貴ばざる」。どんな世の中であっても、どんな人間であっても、この法というものを尊ばない者はない。その三つの宝を敬え、ということが第二条。それによって初めて「和」が実現できる。世界の平和、日本の平和、家庭の平和、学校の平和、全部が実現できる。これが、聖徳太子が日本の文化国家をつくりあげられた根本理念であったために、私は「和敬幼稚園」という名前をつけてあげた。「先生、ぜひそれを大きく書いてくださいませんか」「どんな字で書くんや」「豊二枚ぐらいの大きさに書いていただきたい」。そんな字は書いたことがない。筆を二本か三本集めて、書いてあげた。たまたま松山へ講演に行ったときに、その方が私のところへやってこられた。「ぜひ幼稚園へ来てもらいたい」。参りました。大きな幕のようなものになって、額に入ってその幼稚園に飾ってあった。「和

敬幼稚園」。それ以来、私は「和敬」という言葉が非常に親しい言葉になっておる。おそらく前川先生が「和敬塾」というものをおつくりになった根本理念の底にも、これに通ずるものがあるのではろうと拝察するのであります。

私はこれまで日本中を飛びまわって、東京大学、今の東京教育大学（昭和五十一年時点。筑波大学の前身）、東京文理科大学（旧制）、國學院大學、日本大学、東洋大学、九州帝国大学、北海道帝国大学、東北帝国大学、あちらこちらに臨時講義に出張してまいりました。学校の休みのあいだは、夏休み、冬休み、春休みも、日本中を駆けずりまわってお話をして歩いた。とうとう六十で定年になった。「アメリカに来てほしい」「カナダに来てほしい」、むこうからの要求でやむをえない。アメリカやカナダにも何十万の日本の一世二世が行っておる。また、アメリカ人やカナダ人にも、宗教の問題、仏教の問題を説いてあげることが大事だ。東大を定年で辞めて、満六十になってから十年間、アメリカとカナダへ行っておった。そうして日本へ帰ってきた。今から八年前、日本は東大の安田講堂を中心に全国で大学騒動が起こっておる真最中だ。終戦直後、大勢の学生たちに講義

をしたり、日本のあちらこちらで話をしておった時代とは雲泥の差であった。あの安田講堂が若い学生たちに占拠されて、赤い旗をてっぺんに立て、警察やそういう人たちと戦争の真似ごとをやっている。これでは困った。日本はどうなるんだろうか。こう思ったときに、私は私としての道を行かなければならん、こう考えた。砂の中で死んでいった若い学生、あるいは歳をとった將軍連中、こういう人たちの死んでいくときに頼んでいったあの言葉を、もういちど世の中に出してあげる必要がある。こう考えまして、それを再版いたしました（『平和の発見―巢鴨の生と死の記録』一九四九年刊の改訂版、百華苑）。そうして時を待ったのでありますが、幸いに現在は表は平穩になりました。しかしながら、日本はまだまだ物質文明に追いあげられておって、宗教という問題はほとんど問題にされていない。おそらく諸君方のなかにも、宗教という問題はいちばん縁遠い問題であると思う。それは我々も同じことである。大学の学生時分には、宗教なんていう言葉は非常に遠い問題であった。

私は大学を出て、大学院で三年ばかり勉強しておった。それからヨーロッパへ留学することになった。私が大学を出たのが満

二十二歳。二十二歳で大学を出て、東洋大学や日本大学の講師、教授をしていた。したがって、パスポートの肩書きは Professor Toyo University というような名前だ。えらそうな顔をしてでかけていった。ところがロンドンの税関を通ったとき、私と一緒にいった友人に高野山のお坊さんがあった。私より十何歳年長であった。大学の先生でないから、Priest、「坊さん」という名前をつけてあった。税関で私たちの手荷物は全部いちいち鍵をあけて検査される。ところがその坊さんだけは、'Priest all right'、と言ってカバンを開けないで通ってしまった。私はそのとき初めて驚いた。日本では坊さんと大学教授とはまるきりちがった考え方であった。大学教授のほうがえらいんだと思うておったのが、イギリスへ来たとき、大学教授でも一般の人と同じようにカバンを鍵で開けられて中を調べられなければ、税関を通るわけにいかん。ところが坊さんだけは「カバンを開けないでもよろしいからそのまま通りなさい」。へえ、珍しいことだな。これが、まだ若い、二十四、五のときに外国に行った人間として、初めて Priest というものに対する驚きの目をみはったときなんだ。

それから、イギリスの大学の課程に入った。いろいろと遊んだり、勉強したりする。何をやらせても日本から来た人間は頭がよい。トランプを遊んでも、あるいはお庭でゴルフを遊んでみても、何をやっても上手だ。物理のこともわかっている、科学のこともわかっている。数学もできるし、英語もある程度読むし、フランス語もドイツ語もやる。ところが、だんだんと話をしていくあげくのはてに、

「あなたは宗教は何ですか」

こうくると、たいていのその当時の人は、「わしは宗教はないんだ」

こう答える。現在でも、日本からアメリカ・ヨーロッパへ行く人はそうなの。いろいろと感心させられるが、最後に「宗教は何か」、こう訊かれたときに「宗教はない」「無宗教」。

これは現代の日本なら通ずる。ところが外国では通じない。外国では宗教のない人間は「動物」なの。どんなに学問ができて、どんなに手が器用であっても、どんなにスポーツが上手であっても、宗教のない人間は動物と一緒にだ。われわれの友人、あるいは当時の海軍や陸軍、あるいは政府や司法省（法務省）や外務省から行っておった連中が、結局、宗教がないというところ

に行きついちゃう。それからバカにされちゃう。そして反省する。「これは悪かったなあ。日本では宗教なんていうことは問題にならなかった。宗教というものはお葬式だ。宗教というものは死んでからの問題だ。歳をとってからの問題だと思っておったが、そうじゃない。イギリスであろうがフランスであろうがドイツであろうが、あるいはアメリカであろうが、宗教という問題は人間の心の底にいちばん大切な問題として受けとられておる」。もちろん昔の時代とはだいぶ変わっているから、今の若い人たちがすべてそうではないけれども、しかしながら宗教という問題に対するものの考え方は、だいぶ日本の一般の人とはちがうのであります。それは、私が巢鴨（拘置所）に関係していたときも同じことであつた。

日本は戦争で負けた。負けた国民の中から、戦争犯罪人をいちいち絞りあげて、それで巢鴨拘置所に連れてきた。若い人も歳とった人も、当時の日本を代表する連中がたたくさんおつた。いろいろ調査をしたあげく、「おまえの宗教は何だ」、ほとんど「宗教はない」。「おまえの宗教はないか。家の宗教はあるか」「家の宗教は仏教だ」というようなのが多くて、アメリカにはキリ

スト教の旧教、新教、ユダヤ教、そういう方面の専属の牧師（チャプレン）はおるけれども、仏教のチャプレンというのはいない。「仕方がない。負けた日本から一人だけ坊さんをよこせ」。これがマッカーサー司令部からの命令であつた。「一人だけよこせ」と言う。二人、三人はいらん。ところが日本では、仏教はいろいろ宗派が分かれておる。いろいろ分かれている宗派から誰を選ぼうか、非常に困つた。おまけに年若い人はだめだ。若い人間、そうして英語がわからにゃいかん、あらゆる仏教の問題に通じていなけりやならん。そういうようなことが条件だったんで、日本の政府でも非常に面食らつたらしいが、一ヶ月以上経つたあげくのはてに私が巢鴨へ行くことになつたんであります。そのときに司令部は言うた。「ずいぶん前から日本の政府に要求しておいたが、今になってやっとあんたを送つてくれた。明日からでもよい、あんたならばよいから、どうかやつてくれ」。結局、「一週間に二日、火曜日と木曜日の午後だけ参りましょう。あと五つ六つの大学に関係しているから」と言うて、私が行くようになったんであります。それからというものは三年半ばかり、あちらこちらの大学に勤めながら、講義の合間に

巢鴨にでかけて話をしておった。ところが、巢鴨の中における連中は、大将であろうが中将であろうが兵隊であろうが、あるいは重用された人であろうが、今まで宗教の問題をじかに聞いた経験がない。「天皇陛下神様」で通っておった時代でありますから、宗教という問題になると、仏教徒だ仏だという問題にはぜんぜん関心がなかった。しかし、だんだん話を続けているうちに、ようやくあの人たちの胸にしみこんでいったらしい。初めて宗教という問題をわかったらしいんだ。

私がいちばん最初に会った人は、終戦のあくる年、今から三十一年前、昭和二十一年の二月に巢鴨で会った。巢鴨の中には六百人から八百人が入っていたんであります。全部を一堂に集めて話を聞かすのはアメリカが心配してさせなかった。六十人とか八十人とかのグループに分けて講堂に連れてきた。それで話を聞くチャンスをつくったのであります。横浜で裁判を受けた人で、すでに絞首刑という判決を受けている若い人が四、五人あった。この人たちは、大勢の未決の人と一緒に講堂に出るわけにいかなかったんで、一般の話が終わってからアメリカの将校が一人ひとり私のところに連れてきて、対座して話し

あうことになった。「あなたは何という名前だ」「生まれはどこだ」「家族はどうなんだ」「宗教はどうなんだ」。いろいろ聞いてみるが、はじめは不平やら愚痴やら恨みやら憎しみやら腹立ちやら怒りやら、まあそれは無理もない。まだ歳も数え年で二十七とか二十八の青年でありますから、それが日本の命令によって、志願したわけでもなかったんだが兵隊にとられて、どうせ兵隊になるなら幹部候補生になろう士官になろうと、試験を受けて合格した。とうとう俘虜収容所の所長にまでさせられて、国のため日本のためと思うて一生懸命やっておった。上官の命令だと思つてやっておったのが、戦争に負けたあげくのはてに「おまえの収容所において、おまえが所長のときにアメリカの兵隊が死んだ、オランダの兵隊が死んだ。それはおまえの責任だ」。薬がなかったとか、あるいは食べ物がなかったとか、いろいろなががあったんでしようが、結局それがそのときの所長の責任となつて、絞首刑という判決を受けた。腹が立ったり、恨めしくなったり、愚痴が出たり、それは無理もない。私はいちいち静かに聞いてあげた。「残念だなあ。まあ、できるだけ刑が軽くなるように運動しましょうよ。あなたの親戚なり友人なり、

昔の友達なりと一緒にやってみましょう」と慰めながら、その合間にそれとなしに宗教、仏教の問題を話しておった。

あるとき、その人は「先生、帰るときにこのハガキをポストに入れてくださいませんか」と頼んだ。「君、そう言うけれども、この巢鴨の拘留所からハガキを出すことはできませんでしょう」「はあ、できるんです。けれどもひと月に一枚と限られているんです。このハガキも五十文字からよけいに書いてはならんです。できるだけ考えて五十文字に切りつめて書くけれど、ときどき没収されてしまつて家に届かんらしい」「ああ、そうかね。そんなら出してあげましょう」。受けとつて、帰る途中に郵便局のポストの前を通つたから、ここへ入れようとした。「待て待て、これはハガキだから読んでもよからう。何を書いているかな」。お母さんのところへ書くハガキなんだが、歌が四つ五つ書いてあった。私はそれを写しておいた。こういう歌が書いてあった。

老いし身を哀れとなくなお母さま
井戸の蛙と敬は笑うぞ

「敬」というのは和敬塾の「敬」で、自分

の名前なの。由利敬（ゆり・けい）という人です。この人は三つのときに父親が亡くなった。それから母親の手ひとつで育てられた。お母さんは六十過ぎたおばあさんで、この人は二十七ぐらいの青年であった。お母さんは三つのときに父親に亡くなられて、自分の手ひとつで一人息子を育てた。餅を引きのぼすような思いで、「大きくなれ、大きくなれ」と育てた。小学校へ入った。卒業した。中学校へ入った。卒業した。昔のことだから中学五年生。やれやれ中学を卒業した、と思うたとたんに兵隊にとられた。当時は戦争の直前でありますから、赤いハチマキ、赤いタスキをさせられて、大勢の郷土の人に、万歳、万歳、と送りだされた。「あなたの息子さんは一人。しかし立派ですなあ」「少尉だそうだ」「中尉だそうだ」「九州の大牟田の、あの俘虜収容所の第一代目の所長さんらしいね」。お母さんはちやほや言われるたびにうれしかった。ところが戦争後、昭和二十一年の一月のはじめ、この子が日本で最初の絞首刑という判決を受けてからというものは、お母さんは替われるものならば自分が替わってやりたいと思うけど、そういうわけにいかん。今とちがつて、食物もマッチ一本も電気の球ひとつもろうそくも、全部が

配給制度の時代だから、生活のために八百屋の前や米屋の前で立ちん坊をして配給の順番がくるのを待ってなければならん。お母さんが待っていると、うしろのほうからこそ話の声が聞こえる。静かに耳を傾けて聞いていると、「あの人が由利さんだ」「このあいだ新聞に大きく出ていたでしょう。絞首刑の第一号」「あんな兵隊がいたから日本が負けたんだ」「われわれがこんな苦勞をしなくちゃならんだ」、この人のために日本の国が戦争で負けたかのように、よつてたかつて言う。人間というものはさみしいもので、戦争のときにはみんなでちやほやしたんだが、負けたとたんに白い目で見る。お母さんはもう生きた気がしない。六畳間に閉じこもって寝たきりになった。「どうにもなれ。食べ物なんかいらん」。ところが仲のよいおばあちゃんやんがやってきて「お母さん、そんなことしちゃだめよ。もつと元気だしなさいよ。マッカーサー元帥なりキリストの神さんなりに頼むとか、地藏様なり観音様なりにお百度参りでもしたらいいじゃないの」「ああそうか。それもそうだ」。いくらか気をとりにおして、いよいよ苦しいときの神頼み。あちらに走りこちらに走り、「ひとり息子の命が助かりますように」。親の真心、

六十を過ぎたおばあちゃんが血眼になっているということが、風のたよりにこの人の耳に入ったらしい。それを心配しての歌であるように思う。

「若いし身を哀れとなくなお母さま井戸の蛙と敬は笑うぞ」。宗教という広い世界があります。無限の世界であります。時間空間を越えた世界であります。「井の中の蛙となつて、ちつぽけな人生、わずか五十年、百年だけのことを考えて、くよくよししてくださいすな」。むしろ、あとに残していくお母さんを励ます、慰めるような歌をつくつておる。

この世をばせましと泣くな井の蛙
信じてすがれみ仏の手に

「井戸の中の蛙のように、針の穴から天をのぞくような人生観をもつてくださいますな。どうか広い広い世界で、目に見えない仏様の胸に抱かれておる自分の現在を考えてみてください」。ここに、宗教という、いまだかつて考えてもいなかった世界を母親に伝える気持ちになってくれた。

招かれていそがしいぞよ敬が身は
来い来い来いと神も仏も

これは、私が「二河白道（にがびやくどう）」について話したことがある。広い荒野を旅人が歩いておる。東から西にむかって、歩めども歩めども、誰にも出くわさない。そのうちに恐ろしい狼やら大蛇やら象やら獅子やら、そういうものが追いかけてきて、この人を食おうとやってくる。恐ろしいからどんどんに逃げる。群賊もやってくる。まあ、いろいろなもんがやってくる。とうとう行きついたところに二本の川がある。火の川と水の川。向こう岸までそう遠くはないが、しかしながら底のない深い河だ。その川に落ちたが最後、再び生きては戻れない。その真ん中にわずか三寸か四寸、片足の幅ぐらいの細い道がある。ところがその白い道を、火の川の炎と水の川の逆巻く怒濤とがかわるがわる覆い隠している。ちよろちよろと見えたり見えなかつたりする。もう絶体絶命。旅人は三方から囲まれてしまつて、もはや前へ進むわけにもいかない。うしろからは大勢が追いかけてくる。北と南からは火と水が迫っている。絶体絶命のときにむこうから声が聞こえた。「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護る」。「おまえは静かにその道を渡つてこい。わしが守つてやるぞ」。こう聞こえたと思うと、うしろからも声が聞こ

える。「その道を迷わずに渡つていけ。あの声をたよりに渡つていけ」。それならと、その声に信頼して渡りきつたところが、難なく向こう岸に渡れて、しかもそこに大勢の親しい人、亡くなったお父さんやお母さん、おじいさん、おばあさん、ひいじいさん、ひいばあさん、お友達やらが待つている——という話をしたことがあるんでございませうが、それが歌に出たんだと思う。「招かれていそがしいぞよ敬が身は來い來い來いと神も仏も」。向こう岸から神様も仏様も自分の戦友たちも手招いている。自分の小さいときに亡くなったお父さんやおじいさんおばあさんも、大勢待つておつてくれる。こういうような歌をつくつてくれた。そこまで進んでいってくれた。私は実にうれしい、ありがたい気持ちでおつたんであります。そういう方があとからあとから出てきた。

に追われ、逃げてきた。室蘭に上陸したときにはもはやフラフラになつていた。そして室蘭の收容所に入つて大勢死んだ。そういうことが原因で、結局この人は絞首刑という判決を受けた。はじめは、恨み、憎しみ、腹立ち、怒り、愚痴、いろいろあつた。無理もない。ところが、だんだんと話をしていくうちに、この人はこういう歌をつくつた。

仁という義という倫理一応は
つまづきて見るわれも変れり

現在とちがひまして、戦争までの日本の教育には小学校から修身というものがあつた。上へ進めば倫理というものがあつた。上へ進めば倫理と見られるわけも変れり。結局、人間の生活としては仁義の道がいちばん大事だ、道德の道がいちばん大事だと教わつてきた。それが「仁という義という倫理一応はつまづきて見るわれも変れり」。

「今まで道德や倫理を最高の徳目だと考へてきた我も、つまづいてしまつた。行きづまつた。それでは通らない世界がここに出してきた。我も変わったものだなあ」。自分自身を深く反省している。宗教という限りのない世界に心の眼が開いた自分を、自

ら反省している。その反省の気持ちだが、

恩讐の彼方にこそは道はあれ

我れえまひ(笑まひ) つつ人を見んかな

「恩や仇、そういう人間倫理の世界のはるかむこうに真実の道がある。わしの首を絞めるアメリカさん手が痛くなかろうか。にっこり笑って死んでまいりましょう」。もはやこうなつてしまえば、敵だ味方だ、仇だ恩だ、そういう相対的な世界をはるか越えていく。自我や他我というものを越えた広い世界へ、この人の目がひらいていることがわかるのであります。

しかしこの人はなかなか理屈っぽい人で、私と話をしておつてもほとんど笑つたことのない人であった。だが、いよいよ殺される日がきた。最後のときには今までの部屋から特別の部屋に移され、そこに私が訪ねていった。いつも渋い顔して話したが、今日はいつそう渋い顔であの部屋にいるんじゃないかなあ、思うて参りますと、案外にもこの人にはこやかな顔色をして私を迎えてくれた。私は独房に入った。がちゃんと錠前が閉められ、二人で独房のなかで話しあう。ニコニコしながら話しあう。アメリカの将校とチャプレン、びっくりし

たような顔をして廊下の外からのぞいておつた。「何がうれしんだろう。いよいよ殺されていく若い日本の青年と坊さん、何がうれしいんだろう」。するとその人は、「先生」「何だ」「夕べこの部屋に移されました。今朝起きて、こういう歌をつくつたんです」「どんな歌か見せてもらいなさい」。いよいよ今晩は殺される、そう覚悟したときの歌なんだ。こういう歌をつくつたか。

かねてより待ちつつありし母上の

み許(みもと)にまいる今日のうれしさ

「先生、私は小さいときにお母さんが亡くなった。父親の手ひとつで育てられてきた。それからというもの、中学校、高等学校、大学と進み、友達の家へよく遊びに参りました。友達のお母さんはとくべつ私をかわいがつてくださった。『この人かわいそうに。母親のない人だ』。かわいがつてくださればくださるだけ、私自身が悲しくなつた。なんで私の母親だけが早く死んでくれたのかいな」。それが最後の日になって爆発してこういう歌になった。お母さんのところに行くうれしさで、殺される悲しさではない。「もはや再び母親には会うことが

できないと思うておつた私が、お母さんにめぐりあえる。今度こそはお母さんのそばで、いつまでもいつまでもお給仕させてもらいます」と。

弥陀仏のたすけてふ船のあればこそ
つたなき(拙き)われも
母のみ許(みもと)に

「阿弥陀様という仏様の、大きな他力のご本願の船があるからこそ、その船に乗せていただいて、坐禅もできない、悟ることもできなかったこの愚かな罪深い私のような者でも、お母さんのところに寄せてもらうのでございます」。こういう安心しきつた喜びの歌を最後の日に残していつてくれたのである。

若い人をもうひとり申しますと、この人もなかなか有望な人だった。島根県の百姓の息子であった。農業学校を卒業したんでありますから、今でいうと中等学校から高等学校になるんでしょうが、やはり兵隊にとられた。どうせ日本の国のために兵隊になるんならば、三年間の兵隊になるよりも将校になろうと志願をいたしました。幹部候補生の試験に合格した。そうして、この人も俘虜収容所の所長に任命され、絞首

刑の判決を受けたんであります。この人もいよいよ死んでいく日の晩に私に歌を残していつてくれた。どんな歌か。

朝風になびくを見度（みた）し

彼の土より 平和日本の日の丸の旗

「明日の朝五時に殺される。花山先生には今までのご恩がある。何か書き残さなければならぬ」というのでつくった歌がこれだ。一枚の色紙にじつと鉛筆で書いた。「朝風に」というのは明日の朝五時に殺されるということをお思いだした。「なびくを見度し彼の土より」、むこうの世界に行つてしまつてゐる。「自分は今度の戦争で敗戦の結果、裁判を受けた。結局、日本のために働いた人間が犠牲になつて死んでいく。しかし私は、日本の国が平和になつて一軒一軒の軒並みに日の丸の旗のはためくのを、お浄土から眺めたいのです」。こういう気持ちだ。戦争が終わつて三十年になります。が、まだ日の丸の旗が国旗であるとか国旗でないとかいう議論がありますように、祝祭日に日の丸の旗が立つてゐるところは少ない。この人は牢屋の中で書いておつた日記にこういうことを書いておつた。「日本の国の日の丸の旗は、世界中、類のない

立派な旗だと思ふ。あの赤い日の丸は太陽を象つたものだと思うが、あれは一億日本国民の魂の結晶、団結のしるしだ。それが戦争に負けてからあとというものの、俺が俺がという人間ばかり出てきて、あの丸い日の丸のあちらが欠けたりこちらが崩れたり、じつに悲しいものだ」。最後の日に、私が何か記念に書いてほしいと言つたときにつくつた歌がこれなの。「朝風になびくを見度し彼の土より平和日本の日の丸の旗」。「世界一の立派な日本国民みんなが心の団結をしようとしたシンボルである日の丸の旗が、一軒一軒の軒並みにひらめく日を、私はむこうの世界の浄土から願ひつづけます」と、こういう歌をつくつておるのであります。この人が殺されていつたのが昭和二十一年の八月九日の朝なんだ。昭和二十一年でありますから、その頃はマッカーサー元帥の命令で「日の丸の旗は立ててはならない」、こういうきつい命令だつた。日の丸という言葉もいつてはならん、というような命令の出たおつたときなんです。そんなことには無頓着なんだ。死というものを目前としたこの人には、マッカーサーが何と言おうとアメリカが何と言おうと、そんなことどうでもええ。「どうか日本の国が平和な国になつて、日の丸

の旗が一軒一軒の軒並みになびく日を、私はお浄土から願ひつづけます」という気持ちで、そこには恨みや憎しみや復讐というようなものは少しもない。はじめあつた怒り、憎しみ、腹立ち、愚痴、そういうものはどこかへ消し飛んでしまつて、「将来の日本が明るい日本となつて、国民団結して立派な平和な国をつくりあげていつてくれるように」という願ひだけで亡くなつていつておる。この人は毎日毎日一分一秒といふ時間を惜しんで勉強し、書物を読み、それを自分の心の糧として生きておつたんであります。が、トイレの紙を手で割いて、鉛筆で歌を書いたのが壁に残つていた。私はそれを剥いで持つてきて、「お父さん、これは大事にあんたの記念にしまつておきなさい」と言つてご遺族にお渡ししたんであります。が、

お蔭様今日も一日生かされたぞ

噫（ああ）、もつたいない

ありがたい「南無」

この人はもう絞首刑の判決が出ている。いつ殺されるかわからない。しかし「今日も一日生かされた。お蔭様、もつたいない、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」で毎日その

日暮らしをしておる。そこに、恨みとか憎しみとか腹立ちというものは全然なくなつてしまつてゐる。宗教という世界に入つたときには、もはや人生における対立であるとか相対的なものの考え方、そういうものはなくなつてしまふということを、この若い人たちが身をもつて私に教えてくれた。

ある人はこうも言った。「先生、私はおかげさまで、今こうして感謝の日暮らしをさせてもらつておりますが、もしも自分が世の中に出て、七十、八十まで長生きをしておつたとしても、結婚して子供を育て、家を建て直して、大きな墓石をつくつて死んでいくのがせいぜいの山であつたでしょう。何の喜びもなく、何の感謝の気持ちももつことができないでおしまひだつたでしょう。今こうして巢鴨へ来て先生に目にかかることができ、本当に自分は幸いでした。どうせ人間は一度は死んでいかなくちやならんです」。そう言うて、ほとんどの人が喜んで死んでいつてくれたことは、私としては非常に尊いものを教わつたんであります。若い人たちがそうであつたように、今度の戦争の責任者もそうであつた。

今度の日本と世界との戦争の責任者と

してAクラスの人たち（A級戦犯）が裁判を受けた。その中で七人だけが絞首刑を受けて死んでいったんであります。その戦争のときの総理大臣、陸軍大臣であつた東條英機元大將は、いよいよ絞首刑の判決があつてからあと、私と向かいあつて二人で話しあつた。「あなたは終戦後いちど自決を図られたことがあります。新聞で読んだんです。なんだかあれが芝居であつたとかオモチャのピストルであつたとか、でかでかを書いてあつたんです。まさかとは思いますが、しかしあなたに亡くなられてしまふと、死人に口なしでわかりませんから、日本国民のひとりとして、どういふ事情であつたのか、私に説明してくださいませんか。将来の日本の記録として残しておきたいと思ひます」。私がこういふと、東條大將は間をあげずにさつさと言われた。「あれはですな、究極のところを申しますと、自分は戦争中、戦陣訓というものをつくつて、『日本の軍人は敵の捕虜になつてはならない。万が一捕虜になるようなことがあれば潔く自決をせよ』、こう教えておいた。それを実行したまでなんです。他の人たちにはあらかじめ知らせがあつたが、自分には突然にやつてきた。そこで間髪をいれず心臓をめがけてやつたん

だが、撃ちどころが悪かつたか知らんが、ともかくもアメリカの兵隊から輸血をさされて成功しなかつた」。こう言われた。「しかしあのときに万が一あなたが死んでおられたとすると、今のような宗教のなかに入る機会がなかつたんじゃないやせんか」。東條さんはすぐ答えられた。「そうです。ひとつには宗教のなかに入ることができませんでした。二つには人生を深く味わうことが開かれて、自分の言いたいことをいぢおう言わせてもらひました。今となつては何の思い残すところもなく喜んで死んでまゐります」。こう言われた。私は東條さんの言われるとおりに自分の膝の上で鉛筆で書いておつた。遅く家に戻つては、一時、二時、三時になるまでも清書して、そうして残しておいたんであります。結局、東條という人は、自分は戦争の責任者だから、近衛（文麿）総理大臣であるとか、あるいは他の文部大臣であるとか、阿南陸軍大臣であるとか、自決をしていつた人もあるし、青酸カリを飲んでいつた人もあるし、いろいろあるが、自分としては早まつたことをしてはならん、何のために戦争をしなかつたか、言うべきことを言わなくちやならん。アメリカは絨毯爆撃

あるいは原子爆弾というようなことで日本の国民に対して大いに損害を与えたから、ああいうことに関してはアメリカは責任を感じなくちゃならん、というようにことを言いたかったんだ。ところが、だからして自分はいつ何時殺されるかわからんから、あらかじめ医者に自分の心臓の場所を訊いておいた。「ここが心臓か」。床の間には日本刀の大小、ピストルの大きなのと小さいの、自決用と敵を殺す用と二通りちゃんと用意しておいた。ところが、自分だけは何の予告もなしに突然にやってきたから、これはあやしい。今度の戦争の責任者は、ドイツのヒットラーはどこ行ったかわからないでうやむやになったし、イタリアのムッソリーニは国民のあいだで磔になって死んでいる。結局、三国同盟で残ったのは自分だけであった。これはフライリピンに連れられていくか、あるいは中国に連れていかれるか、あるいはシンガポールにつれていかれるか、オランダ・ジャバやスマトラに連れていかれるか、アメリカに連れていかれるか。なぶり殺しになると思つた。自分は戦争中、日本軍人は敵の捕虜になるな、捕虜になるようなことがあれば潔く自害せよと教えておいた。それを実行したまでなんだ。ところが、医者に見つ

おいて心臓のありかまでわかつておつたんだが、急いでやったために、結局、心臓からほんのわずか外れて肺を貫いた。アメリカのMP（憲兵）たちはどこかどと東條の家に飛びこんできた。ピストルの音を聞いたもんだから、中に入って東條を取り押さえた。アメリカの兵隊から輸血をして、どんどんと血を送った。いちおう落ちついてから大森病院に連れていって手当を加えた。こういうのが事実であった。だから東條さんに「あのとき死んでおられたら、宗教というものを知らずにあなたは死んでいたんじゃないやありませんか」と訊いたとき、東條さんは「そうです」と答えられた。「ひとつは宗教の世界に入ることができました。今となつては本当にもつげの幸いのございました。二つには人生を深く味わうことができました」と。

わつた。歌も詠む、詩もつくる、発句もつくる、ということができた。遺言も書く。東京裁判が開かれて、かねて自分が言いたいと思うことを言うことができ、今となつては何の思い残すところもなく喜んで死んでいく、というのが東條さんの私に対する答えであつたのでありますが、どういふ事情で日本が戦争をしなければならなかつたのか、東條は何を言うていたのかというような事柄は、だいたいその記録をご覧になればよくわかつてくださると思う。ところが、巣鴨に入つてからの三年前後のあいだというものは、社会とまるきり隔たれておられるので、晩年の東條大将という人を知っているのは私だけだ。家族も月に一度ぐらいしか面会に行つておらん。その面会も小さな窓越しで、わずか十分か二十分だけしか面会が許されないのであります。それから、死んでいく最後の場面は言うまでもなく、ともかくたびたび会つていろいろ直接話しあうことは他の人には許されなかつた。結局、私以外には、新聞記者も知らなければ報道陣も知らないんであります。それから、私が言うたことだけがいま記録に残つておるのであります。東條大将は、私と話をするときにはアメリカの将校三人に監視されて出てきておられた。こうい

う広いところで、二人に監視されて出てくる。そして前に座る。ベンチに腰かける。私は少し高いところの椅子に座っているんですが、仏さんがここにあるわけなの。そうして、東條大将の右手が、アメリカの将校の左手と手錠で縛られている。暴れることも逃げることもできなくなっている。こちらにもアメリカの将校、うしろにもアメリカの将校。三人が座って監視している。そうして私と一時間か一時間半しゃべっている。そのときに東條さんは「先生、はじめはこれが嫌だったですな」、自分の縛られた手錠を見ながらこういうわけ。「そうだったでしょう」「ところが、この頃はこれもよいと思うようになった」。妙なことを言うなと思った。「どうしてですか」。訊くと、「私がこうして手を合わせて仏様を拝もうとすると、このアメリカの将校まで一緒に手をあげて拜んでくれる。ありがたいですな」と答えた。「今このアメリカさんのところには仏法も念仏も何もないけれど、いつかはこれが因縁となってこの人の国にまで仏法が伝わっていくと思うと、今ではこれがうれしくなった。散歩するときでも一緒にこうして手つないで散歩してくれませんか。ありがたいですな」。はじめはポカーンと聞いておった。

何を言うたんかな、皮肉でも言うたんかなと思った。じつと顔見とつたが、「あんた、えらいことをおっしゃいますな」。自然とそう言わざるをえない。

諸君がたでも、いま私が言うたことが何のことか、味わってみないとわからぬでしょう。東條さんは右手は縛られているんですな。左手にこうして数珠をかけて、仏さんと私を見ている。右と左の手を合わせて仏さんを拝もうとすると、アメリカさんの縛っている手が自然と上にあがってくる。この人まで仏を拝むようになってくれる。「ありがたいですな。これが仏法の因縁というものかと思うようになった」。はじめは嫌だった。「こん畜生。解きなあ、解きなあ（解いてくれ）」、こう思ったんです。アメリカ、ソビエト、中国やフランス、とにかく五十三の国をむこうにまわして、戦争に号令かけた人だ。そのときは居丈高にやっとなつたでしょう。戦争に負けたとたんに、畳二枚の独房に押しこめられ、錠前かけられて、百燭（※約百カンデラ）の電球をつけっぱなしで昼も夜も監視され、毛布をかぶって寝ようとするも毛布も引きむしられて、五分間ごとに「自殺してらんじやないか」とつつつかれる。これでは神経衰弱にならざるをえなかった。「信

仰のおかげで、今までこうして無事で生きてこられました。信仰がなかったらとつくの昔に神経衰弱になっておったでしょう」と言いました。それが、はじめは嫌だったというその手錠が、あとでうれしくなる。なぜか。「自分がこうして手を合わせて仏様を拝むと、このアメリカさんまで一緒に拜んでくれる。ありがたいなあ」。一週間に一度か二度、天気の良い日に、独房だけにおると運動不足になるといので散歩をさせられるんだが、その散歩のときもアメリカさんと手をつなぎながらぐるぐる同じところを回っている。これもはじめは嫌だったが、今となつては、これも因縁かと思うとうれしくなった。本来は、憎しみ、腹立ち、怒り、不平、愚痴で終わらねばならん同じ手錠が、今度は喜び、感謝の手錠に変わった。ここに、同じ現象がもの心のとらえ方によって、恨み、憎しみが、喜び、感謝に変わる。これが宗教というものだ。いいですか。宗教というものは理屈でもない、理論でもない、学問でもない。けれども、人間の心の底を支えてくれる大きな力だ。だから、宗教というものは、ただお葬式だ、あるいはお経をあげることだ、お祈りすることだ、そんなことじゃないんです。毎日の人生、起きているときも寝て

いるときも、自分が生まれて死ぬまでのあいだ、いちばんの心の拠りどころとなるのが宗教というものだ。拠りどころとなるものによって毎日生活する。学問することも勉強することも、スポーツやることも何することも娛樂することも。すべてがそれに裏づけられている人生は、非常に貴重な尊い人生になる。

だから東條さんたちがウェブ裁判長から絞首刑の判決を受けた日に、アメリカやオランダ、イギリス、中国の連中は、「あの連中、どんな顔してどんな態度して判決受けるかいな」といって、東京裁判の最後の場面を興味半分で見にいったらしいが、あくる日の新聞を見ると、「どうも日本の軍人というのはわからん。われわれには了解できん。ほとんどが申しあわせたように最敬礼をしたり、にっこり笑って出ていった。妙だな」、こういう記事が出ておった。東條大将はその日、こういう歌をつくっている。

はてしなくすめるみ空にわれを呼ぶ
みこえを尊（たか）く仰ぎてぞきく

「おまえは今度の戦争の最高責任者だから絞首刑」。ウェッブ裁判長が絞首刑の判

決を宣告したのに対し、受けた東條大将は「果てしなく澄めるみ空から、早く来いよ来いよと呼びたもう阿弥陀仏の呼び声が尊い。これを高く尊く仰いで聞きます」という。受け方がちがうんだ。いいですか。

人の絶対の人生を断ち切って「おまえ殺してやる」というのが法律の裁判だ。ところが東條大将の受け答えは「生まれたり死んだり生まれたり死んだり、娑婆往来八千遍の結果の俺が、今まで逃げておった俺が、果てしなく澄めるみ空から早く来いよ来いよと呼びたもう阿弥陀仏の呼び声が耳に聞こえて、ありがとうございます」。こういう永遠絶対の世界へ帰っていく気持ちで、感謝の気持ちで受けたんだ。宣告した人間の心理状態と、それを受けた人間の心理状態が、まるつきり別なんだ。宗教という世界と、現実生きていくわれわれの人生の問題とはちがうわけだ。法律や裁判というものとちがうわけなんだ。

それでいよいよ殺されていく日の朝、東條大将は私にこう言われた。「先生、夕べは寝ているあいだに引っぱりだされてやられるんじゃないかと思うておったが、二十四時間前に教えてくれて本当にうれしかった。あれから部屋に戻って、夕べゆっくり休んだが、巢鴨の所長にあいさつして

くるのを忘れた。先生からよろしくあいさつをしておいてください。今朝起きて、家内にこういう歌をつくりました」「どういう歌ですか」。どういふ歌かというのと、

さらばなり有為（うい）の奥山
けふ越えて

弥陀のみもとに行（ゆ）くぞうれしき

「さらばなり有為の奥山けふ越えて」というのは「色は匂えど散りぬるを、我が世たれぞ常ならむ」（※いろは歌）。みんな死んでいかねばならん。咲いた花は必ず散る。この現実の人生、生まれたものはみんな死んでいく。つくったものは壊れる。「この有為の奥山をけふ越えて、弥陀のみもとに行くぞうれしき」。無限の世界、永遠の世界、限りない永遠絶対の世界に行く喜びをそこに歌った。そんなら、そこ行っておしまいか。そうじゃない。

その次の歌に、

我ゆくもまたこの土地にかへり来ん
国に報ゆることの足らねば

「阿弥陀さんの浄土へでかけていくけれども、またこの日本の国に帰ってきます。

国に報いることがなければ、誠に申しわけない。天皇様、国民の皆様、申しわけのない戦争によつてずいぶんご迷惑をかけた。一日も早く平和な国の建設、文化国家の建設に働かせていただきます」。こういうことなんだ。そうしてその日の晩まで絶えず会つて話をしとつた。仏さんの前でおろろそくに火をあげて、仏さんに供えておいた葡萄酒のコップと水のコップを一杯ずつ飲ませてあげた。「あなたがたの最後のひと言を書き残して、ご家族に残してあげたいと思うておつたが、もうそんな時間はないらしいです。名前だけでも書いておきましょうか」。東條大将のほかに、刑を宣告された大将たちは両手を縛られている。こんな手つきで書けるかいな。それで書かれたものがこれでありませう(額を見せる)。昨年でありましたか、箱根にパール・インド判事の記念館ができたときに(パール下中記念館・昭和五十年開館)実物を撮らしてほしいというのでお貸ししました。それで平凡社でこの額をつくられた。あの人たちが書いてゆかれたのはインクでありました。三十年も昔のインクでありますから、色が非常にぼやけておりますが、はつきりと同じ大きさにこうして印刷してもらえた。はじめが土肥原賢二、もとの陸軍大

将。二番目が松井石根、もとの陸軍大将。南京総攻撃のときの総司令官。三番目が東條英機、元の総理大臣で陸軍大将。四番目が武藤章、もとの陸軍中将。この人がいちばん若い。その次が板垣征四郎、もとの陸軍大臣。陸軍大将。次が広田弘毅、もとの総理大臣。それから最後が木村兵太郎、もとの陸軍大将。この七人の方々が、今度の日本戦争の最高責任者として、政治的責任者として、世界中の判事によつて絞首刑の判決を受け、亡くなつていかれたんであります。その直前、仏さんの前で両手を縛られたまま一人ひとり書いてゆかれた文字であるのであります。ほとんど平生どちがわん字で書いておられた。平生は独房のなかで筆もなく、鉛筆しか持たされなかつたんであります。最後に筆で書いていかれた。それが終わつたら「天皇陛下万歳」と「大日本帝国万歳」を三唱されて、そのあとです。今まで話したことは覚えておかんでもいい。これだけは覚えていってほしい。七人の方々はいよいよ殺されていく寸前、右と左にひとりずつ大将たちの番をしているアメリカの力の強そうな兵隊にむかつて「長い間ご苦労だったな。ありがとう、さようなら」と、こう挨拶しているんですよ。これは普通はなかなかできないこ

と。「必ずおまえも死ねよ」と言うて死んでいくのが今までの習慣だ。南方で殺された人たちはだいたいそうであつた。ところが、巢鴨で亡くなつた七人の人たちは、監視している兵隊たちに「ありがとう、さようなら」と挨拶をした。これはわかれわれ日本人として、永久、世界の人たちに誇らねばならんものなんだ。死んでいく最後に、恨みもなく憎しみもなく、腹立ちもなく愚痴もなく「長いあいだご苦労だった。ありがとう、さようなら」、こういう気持ちになれた、なりえた。その根本はなんであるか。これが宗教という。いいですか。宗教の世界には対立はないんだ。俺が、人が、という対立がない。憎しみはない。感謝だけがある。ところが、それを見ておつた、聞いておつたアメリカの将校たちも、やっぱり胸がつまつたとみえる。つかつかと前へ出てきて何をするかと思つたら、右手を出して、大将たちと静かにシェイクハンドを始めた。言葉は通じないから、黙つてシェイクハンドした。この事実も、世界に堂々と教えなければならん事件なんだ。ドイツのニュルンベルグ(裁判)の場合とまるつきりちがう。日本の巢鴨においては、アメリカの将校たちが、殺す立場の人間が、殺されていく大将たちが最後に「ありがと

う」とアメリカの兵隊たちに感謝したのが胸につまった。自然に彼らは手を出して、将校たちが手を握った。これが人間の世界における非常に麗しい情景なんだ。現実の世界では、戦争した者同士、勝った者と負けた者、裁判した者とされた者が憎みあう。大将たちとアメリカの中尉や大尉や少佐たちは、位もちがう、民族もちがう、言葉もちがう、宗教もちがう。けれども、心と心で握手しているところには平等一縷のものが流れておる。これが宗教というもの。対立はないんだ。敵もなけりやあ味方もない。勝った者も負けた者もない。裁判した者もされた者もない。殺す者も殺される者もない。ここにおいて、本当の、真実の永遠絶対の姿というものがあつた。宗教というものはこういうものだ。

ということをあなたがたに申しあげて、今日の話をいちおう閉ずるのでありますが、大将たちはその握手のあと十三階段を昇っていき、頭に黒いベールをかけられる。足がくくられて、胸に縄がかかる。そうして、昭和二十三年十二月二十三日、クリスマスの前の晩の午前零時一分、巢鴨の十三階段の上で、ドワーツと足の下の床が抜ける。ばね仕掛けのやり方で、ガターンと音がして宙ぶらりんになつちまう。する

と首の神経が切れちまうから、本人たちはもう痛くも痒くもないらしい。が、脈はまだ十分ほど続く。だからぶら下がったまま、アメリカの軍医が脈を見ておりますが、脈が切れた、終わったといつて手をあげると、ずつと下におろして、お棺におさめる。私はお棺にお経をあげ、顔を見た。素直な顔をしておられる。憎しみじゃないんだ。恨みじゃないんだ。感謝の気持ちで死んでいっておる。これが今度の戦争の最後、日本の代表者たちが、若い人たちとともに真実、喜びをもつて逝かれたところだ。たいてい歴史は繰り返す、戦争のあとに戦争がくるんですが、日本の場合、今度の場合は恨みや戦争の反抗はなくなつた。感謝なんだ。そこにおいてピリオドが打たれた。死ぬ戦争はなくなつた。永久平和というものは、これから建設されていかなければならん。諸君がたは戦争というものについては全然ご存じじゃないから、これからあとの日本を立派な日本に、平和な日本に、文化的な日本に、宗教というものの地盤をも得た日本に、つくりあげていってもらわなければならん。あらゆる面において活躍される諸君がたが、今後、社会に出られ、立派な日本をつくつてもらふ、一人ひとりが大きな責任をもつてやっ

ていかれる——ということをお願い申し上げて、今日の私の話をいちおう終わります。あとで質問か何かがあるそうでございますから、しばらくここでお待ちを申し上げます。

それじゃ、これで私の話を終わることにいたします。(拍手)

● 質疑応答

● 質問

先生のお話のとおり、われわれは仏教について何も知りませんが、ひとつには何も入門の手立てがないということもいえると思います。何も知らないわれわれがどうやってそういう勉強したらよいのか、ということがひとつと、個人のみならず我が国全体について、今後、宗教に対する考え方がどのように変わるか、先生の見通しをお聞かせいただきたいです。

■ 回答

ただいまご質問になつた方のおっしゃるとおり、どういふ方法で宗教の問題を勉強していったらよいのかと思われるのは無理もないことで、現在の日本ではほとんどこういう問題について関心がないんで

す。けれども、こちらの和敬塾の塾長先生はなるべくこういう機会に宗教の問題も加味していろいろ聞いてもらおうという気持ちがありますから、あなたがたは他の塾なり寮なりあるいは下宿におられる人に比べるとまだチャンスがあると思うんです。今後もなるべくそういうチャンスをつかむようにしてもらいたいし、また気をつけておられれば、あちらこちらで宗教に関する講演会がやっております。東京大学の仏教青年会でもやっておりますし、早稲田なり慶應でも仏教青年会があると思いますし、その他の催しもいろいろあると思います。日本全体が宗教という問題について関心が薄いのは、最初から申しましたように、これは明治以後の日本の現在のあり方で、誠に残念。われわれもできるだけのことは努めねばならんと考えておりますが、なかなか力及びません。しかし全然ないわけではない。われわれの知っている人たちで、やはりあちらこちらで話をしていく方もいらっしやいますから、なるべくそういうチャンスをつかむようにお願いいたします。それでいいですね。

●質問

宗教には、イスラム教とか仏教とかキリ

スト教とかありますけども、なぜ先生は数ある宗教のなかから仏教を選ばれたか、それをお聞きしたいと思います。

■回答

宗教というものは世界にいくつもあります。まあ六大宗教といわれるだけに大きなものは六つだけでも、そのほか小さいのを数えればもう数百とございます。どの宗教も決して悪くはない。その人に適合した場合にはみなそれぞれ意味があるのでありますから、どれがよい、どれが悪いといわれないので、結局、どの宗教の教えが自分にいちばん適当しているかということを見定めることが大事なんだ。例えば山に登る。富士山のとっぺんはひとつなんだが、富士山のとっぺんへ登る道は東西南北あちらこちらにたくさんある。かつて登った人の道もあるし、これから登っていく人たちのためにまだ道の拓けないものもある。それはいろいろだから、何も宗教は従来あったものだけというわけじゃない。自分で切り拓いていくこともできるんであります。いろいろありますが、そこには困難なものもあり、たやすいものもある。その人に応ずるもの、応じないもの、いろいろございます。同じ仏教のなかでも八万四千と

いわれるぐらいある。お釈迦様という方は、そばへ集まってきた人間の企図に忠じて、その人その人に応ずる教えを説かれた。だからバラエティーがあるわけなんです、どれがいい、どれが悪い、ではない。自分にとってどの道が適当しているかということを見出す、これが大事なんだ。私自身は小さい時分から、生まれつき、仏教、寺のなかで育ち、そういう母親の因縁によってこの道に入ってきたわけなんだ。だから、皆がこれでなければならぬというわけのものじゃないと思う。どれでもけっこうだ。キリスト教でもよけりやユダヤ教でもよけりや何でもけっこうなんだが、同じ仏教のなかでも禅もあれば日蓮もあれば浄土教もあるし天台もありますので、どれがいいとは言えない。いろいろやったあげくのはてに「これが自分に適当だ」ということになるんだけど、そういうことをやっているという、結局、自分の生活もできなくなつて、宗教のために一生を送らなくちゃならぬということになるかもしれないが、これもやむをえない。本当は自分で道を見つけたすということがいちばん大切。それができなかつたら、誰か指導者に会ってその教えを聞く。これを善知識という。自分の善き知識となつて教えてもらう。先生に

指導してもらおう。これが一番いい。先生を
発見することですね。友人でもけっこう。
仏教では善友という。善き友というのは、
友達で師匠になってくれる人をいう。これ
でもけっこう。いいですか、これで。

●質問

先生は東條元首相ですとか、戦前の責任
をすべて背負って処刑された人々の死を
見ておられたわけですけども、そういった
戦前の政治をすべて否定するところから
始まった戦後の風潮ということに関して、
先生はどのようにお考えでしょうか。

■回答

戦前の責任を背負うて東條さんは逝っ
たと。そうですね（「はい」と返事）。そ
して戦後との関係ですか（「はい」と返事）。
質問の意味が私にはまだはつきり飲み込
めないんですけれども。

東條さんたちは自分で責任を背負うて
逝ったが、それで殺されたからというて責
任をまっとうできるものじゃない。誠に申
しわけが立たん、謝りに謝って逝ったわけ
なんだが、けれども殺されるのは当たり前
だと思つて逝った。それを、戦後の人たち
がどう批評しているかということでしょう

うか。あるいは現在はどうかということ？

（「現在はどうかということですか」と返事）
現在を戦前と切り離して、ということにな
るか。しかし、やはり時代はつながってい
るんですから、もう少し時代が経っていく
と、戦争前後、戦争の問題についての論究
にも、だんだんと関心をもつ人が出てくる
と私は思うんです。それは、今テレビだと
か小説だとかに明治前後のものがだんだ
んと出てきているように、必ず歴史という
のは関係ありますから、戦前のことは戦前、
戦後は戦後と、別々のものではないと思う。
いつかは結びつきが出てくると、私はそう
思っています。それでいいんでしょうか。

●質問

新聞なんかを見ていたら、いわゆる唯物
論者ですか、そういう方面の人からいわせ
ると「宗教というのは一種の麻薬である」
というふうなテーゼの出し方をしている
わけですね。そのような考えを、先生の立
場からするとどういうふうな反論なされ
るか、おうかがいしたいです。

■回答

宗教は麻薬であるというような考え方は、
は、だいたいヨーロッパから発生した思想

だと私は思うんですね。ヨーロッパから発
生したということは、だいたい宗教という
ものをキリスト教に限定して起こってい
ると私は思うんです。ところが、仏教とい
うのはキリスト教とは少しわけがちがい
まして、哲学だとか、西洋でいう宗教的な
もの、倫理的なもの、科学的なものをみな
含んだ広いものなんです。因果の道理とい
うようなものも踏まえておりますので、キ
リスト教のように最初から「信じなさい」
というような行き方で神と人間とはつき
りものを分けて、二元的に分けて説明して
いるものとはだいぶちがうから、麻薬とい
うことにはあたりなく思うんです。科学な
りサイエンスなりあるいはフィロソフィ
ーなり、そういうものも仏教の中に含まれ
ておるんですから。宗教と哲学と倫理とい
うものにはつきり分けるのが西洋の近代
思想でして、仏教というものは宗教の中
に入らない。いわゆる宗教の中だけに収まる
ものではないんです。概念が非常に広い
んです。だから、結局、麻薬だという範疇
の中には入らんと私は思います。

●司会

先生から与えられました時間が参りま
したので、これで質問を打ち切らせていた

でございます。ありがとうございました。（拍手）

●参考文献（敬称略・発行年順）

花山信勝編『亡びざる生命』有恒社、一九四九年。

花山信勝『平和の発見（改定版）』百華苑、一九七〇年。

河崎義祐『母の大罪』エイジ出版、一九八一年。

巢鴨遺書編纂会編『復刻世紀の遺書』講談社、一九八四年。